国語科説明的文章における「批判的読み」の実践的研究
ー　ボルノーの「著者が自分で理解していた以上に彼をよりよく理解するとはいかなることか」をてがかりに　ー

学籍番号　199361
氏　　名　渡辺夏樹
主指導教員　瀬戸口昌也教授

１．背景

情報社会といわれる現代において、文章を読んだ時にそれを無批判に受け取る読者でいることはあまりにも危険であり、文章を読んだ後にはその文章に対する自分の立場を表明できるということが重要だと考えた。

このような問題意識を持って、国語科の説明的文章領域に着目した。文章を読んで、ただ書かれている内容を理解するのではなく、文章に対して何らかの意見を持てるように児童が育つ。そのような授業を考えることを本研究の目的とした。

２．「批判的読み」と「著者以上の著者理解」

2.1　「批判的読み」

吉川芳則（2017）は「筆者に立ち向かう、力強い読者（読み手）を育てること」を目的として「批判的読み」による説明的文章の指導を唱えている。書かれている事柄や論理をそのまま受け取るのではなく、読んだ以上は何らかの反応をし、筆者に対して自分の考えを言える読者像が吉川の「批判的読み」における理想である。

「X文章（ことば、論理）に主体的、積極的に反応する」ことを基盤として、「A筆者の発想の推論」と「B自分の考え・論理の形成」を行うことができる。このような読者像が吉川の「批判的読み」では理想とされている。

2.2「著者が自分で理解していた以上に彼をよりよく理解するとはいかなることか」

我々が日常生活で目にする文章の殆どと同じく、説明的文章は「的確さが不完全な文章」である。的確さが不完全というのは、筆者自身が意識化できてはいないものが筆者の中にはあり、それが文章から暗に読み取れるということである。

ボルノーは「どのような業績も一定の世界観的に制約された基盤から生じてくるが、著者はこの基盤についてなんら知っていなくてもよいし、また一般にある限度内でしかその基盤について知ることはできない」と指摘している。抽象度の高い概念を全体として対象化することの困難性を抱えつつも、そのような理解によって人間の創造作用は支えられている。著者は自身から離れて唯事象のみを見るのであって、事象に対する自身の関係を見ることはできない。一方理解者にとっては著者の基盤は自明ではないために、作品の内から著者が基盤としているものを取り出し、そうして作品を理解するのである。言い表されていない背景の理解について、ボルノーは次のようにまとめている。「（前略）理解者は他者であるがゆえに、また著者自身

にとっては自明であったことが理解者にとっては自明でないがゆえに、理解者は、問題となっている表現が生じてきた背景を同時に明らかにしなければならないということである。理解者は著者が自分自身を理解したようには、決して著者を理解できず、一般に著者を理解するためには、理解者は必然的に当の著者が不明確に自分について語ったところのこと、あるいは、また、ただはっきりと自分について知っていたことを越え出ていかなくてはならない。すなわち、理解者は、著者が自分自身を理解していた以上に彼をより理解しなくてはならない。」

筆者の中にまだ言い表されてはいない前提条件や自明の理、イデオロギーなどがあり、筆者の思想・思考に影響を与えている。筆者自身はそれを認識することは難しいが、文章の理解者には可能であり、それを認識することが、よりよい理解と言える。

2.3 ボルノーの論考を基にした「批判的読み」の考察

メッセージの意味をより多角的、多面的に解釈する上では、メッセージの発信者の思想・思考が形成される上で大きな影響を与えたものをとらえることが重要になると考える。あるメッセージが、どのようなイデオロギーの下に息づいているか、また基盤となっている情報、価値観が何か、といったことを考えることで、メッセージの意味の解釈はより広がるだろう。そこでは、情報を受け取るだけでなく選別し取捨選択し適切に活用していく読者像を想定した時には、「著者が自分で理解していた以上に彼をよりよく理解する」という解釈学の視点が大いに役立つ。「自立した読者」像を目指して行われる「批判的読み」では、情報に対して受け身にならず、情報に対して読者の側から価値付けるような読みが目指されている。その際の情報へのメタ的な視点を広げるために、ボルノーの『解釈学研究』でいう所の「著者が自分で理解していた以上に彼をよりよく理解する」ことを取り入れると「筆者に立ち向かう、力強い読者」としての力が一層高まると考える。

３．本研究の成果と課題

ボルノーの論を用いることで、以下のことが示された。我々が日常で目にする多くの文章と同じく、説明的文章もまた「的確さが不完全な文章」であり、そのような文章の理解は「著者以上に著者を理解する」という形を目指して行われる。つまり著者が自分の言表の字句通りに実際に語ったことを理解するだけではなくて、それ以上に、著者が「語ろうとしている」ことをも理解するという課題、すなわち、著者を、彼が自分で理解していた以上によりよく理解するという課題がここでは生ずるということである。「著者以上に著者を理解する」ことで、筆者の中にある、自明の理やイデオロギーにまで解釈の対象を拡張していくことが可能になる。このような読みを行うことで「世界観」を対象とした「批判的読み」の可能性が広がることを示した。以上のことを本研究の成果とする。

本研究では授業の検討を行う対象が第四学年の一単元だけであったため、他の学年・教材では報告書での例示以外の実践例が考えられうる。この点は今後の課題になるだろう。